連載コラム

国際交流員の活動日誌

vol.57

「クリスマスツリー」Christmas Trees

クリスマスが近付くとあちこちでツリーが飾られますが、その起源はドイツだといわれています。キリスト教が広まる前のドイツでは木を崇拝していました。宣教師の聖ボニファティウスは、特に崇拝されていたナラの大樹を群衆の目の前で切り倒し、その木の根元から生えていたモミの木を指しました。天へと真っ直ぐに伸び、冬場でも緑のモミの木の姿はキリスト教の象徴とされ、最も人気のあるクリスマスツリーとして世界中に広がりました。

ツリーの習慣は僕の子どもの時の楽しい思い出です。スーパーの駐車場で売られているモミの木を選ぶ事、「クリスマスツリー畑」から一本を家族で選び、のこぎりで切って持ち帰る事、そして皆で居間にその木を飾るのも楽しかったです。ある年は生木を買って、クリスマス後にむやみに裏庭に植えてしまいました。今では約10メートルの高さになり、秋には落ち葉を車の上にたっぷりかぶせます。

ツリーの習慣を続けたいですが、日本ではスーパーの駐車場の売り場も、ましてやクリスマスツリー畑も見た事はありません。作り物に興味は無いので、自分で育てるしかないと思います。毎年家で飾れるよう盆栽のような和風のツリーを育ててみたいです。何年もかかると思うので、近いうちに始めたいと思います！

地域の魅力 ふる里再発見

企画展「冨田洋々亭と狂歌」④
～伊達・臨史軒関雄※の活動～

企画展
冨田洋々亭と狂歌
12/26㊐まで開催
保原歴史文化資料館

伊達市は、狂歌（俳諧歌）の世界で高い地位を占め、文化水準の高い地域として全国に知られていました。

狂歌では「連」と呼ばれる同好者の集団を作っていました。旧伊達町の伏黒村には冨田洋々亭の「竹連」、岡村には「櫻岡連」の二つの大きな連がありました。

「櫻岡連」を作ったのは「臨史軒関雄」という人で、農民たちに狂歌を深く浸透させた人物です。

臨史軒関雄は、岡村（旧伊達町）の名主・菊田佐平の三男として寛政5年（1793）に生まれました。幼少期から武士道を学び、若い時から何事も1人で決する気力を持つ人物であったといわれています。

文化2年（1805）に商いを志して、保原の「亀屋」で5年間蝋燭製造に従事しました。この間、夜は熊坂蘭斎と共に熊坂適山のもとで画を習い、歌は大田蜀山人の狂歌を学びました。関雄の狂歌号は「薄墨」、後に適山から「臨史軒」の号を贈られています。

その後、国学者歌人である瀬上の内池永年（本居宣長の養子である本居大平の門下生）に師事しました。以降「臨史軒薄墨・久々能舎」と号し、臨史軒の一派は「櫻岡連・臨雄派」と呼ばれました。

臨史軒は岡村を中心に歌合を多く開催し、それまで武士階級だけのものであった文化を一般庶民に広めました。臨史軒の活動で、農民たちも狂歌に親しむようになったのです。伊達市広前の熱田神社や伏黒の水雲神社に、臨史軒が撰者となった歌額（いずれも市指定文化財）が奉納されています。

歌合の様子「齢寿賀筵」
（伊達市保原歴史文化資料館）

※「関雄」の読み方は「せきお」との説もあります。